

出雲大社境内遺跡

いざもおおやしろけいだいいせき



八雲立つ雲太くん

和二くん

京三ちゃん

巨大柱出現



出土した宇豆柱（棟持柱）

史上最大!! 三本束ねの柱

平成12年4月5日の昼前。出雲国の一の宮出雲大社境内にある発掘現場に衝撃が駆け抜けました。なんどこれまでに見たこともない巨大な柱が顔を見せはじめたのです。そして発掘調査を進めていくと、3本のスギの木を束ねて1本の柱にするという、これまでの発掘では例のない柱であることがわかりました。柱は、1本の柱材が1m35cmもある大木で、それらを3本に束ねて直径3mにもなる巨大な柱です。発掘された柱では日本最大のもので、この柱と同じ仕組みが描かれた図面「金輪御造営差図」が出雲大社の宮司家である出雲国造千家家に残されていました。これまで昔の出雲大社は巨大な柱を用いた高層神殿であると言われてきましたが、それを“実物”によって証明することはできませんでした。今回出土した巨大柱によってその本殿の巨大性について具体的な“実物”によって明らかにできるようになりました。

【注】
[宇豆柱]

この出土した柱は、本殿を構成する9か所の柱のうち棟を支える柱一棟持柱（宇豆柱）であると考えられています。そして、この巨大な柱の出現によって、高層神殿の存在がにわかに現実味を帯びてきました。

明らかになった巨大神殿

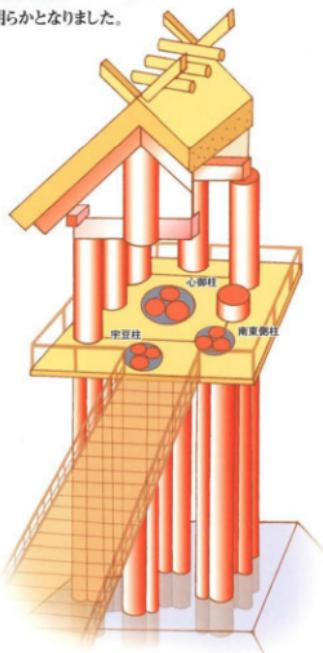
平成12年10月には、棟持柱（宇豆柱）と同じ3本組みの構造をもつ柱がさらに2か所から確認されました。4月に出土した柱を宇豆柱とすると、10月に出土した柱は、心御柱と南東側柱であると考えられます。他の2か所から柱がみつかったことによって、本殿の規模や向きが明らかとなりました。

【本殿規模】

平面規模は、現在の本殿とそれほど大きく変わりませんが、柱の直径が大きく違います。現在の宇豆柱の直径が0.87mであるのに対して、出土した巨大柱は、3本あわせた柱の直径が3mちかくになります。現在の本殿の高さは24mあり、神社では全國唯一の高さを誇っていますが、言い伝えによると、古代の本殿の高さは48mあったといわれています。



出土した3か所の柱の位置関係



柱周辺から出土した遺物

巨大さを物語る遺物

巨大本殿に用いられた道具が柱の周辺から出土しています。特に注目したいのは、使用された鉄釘の大さきです。宇豆柱のすぐ上から出土した鉄釘は、長さ40cm以上で、本殿をつくる木材がいかに巨大であったかが物語ります。そのほか3本の柱材を束ねるために使用されたと思われる帶状の鐵器も出土しています。また柱の底部分からおまつり用と思われる鉄製の新が2点出土していますが、保存状態が非常に良いものでした。

【本殿の年代】

柱周辺からは、祭祀用の土器が出土しており、この土器から推定すると、平安時代終わりごろ（12世紀）から鎌倉時代始めごろ（13世紀前半）に建てられた本殿であると考えられます。



巨大さを語るもの

出雲大社の起源 「日本書紀」「古事記」の「国譲り神話」

この国土を天孫に譲られた大国主神の神殿は、高天原の神の宮殿と同じように「太い柱と厚い板を使って建てられた」と書かれています。出雲大社の神殿はその創建時から巨大な建物だったことがうかがえます。



高さ日本一の証拠!! 「口遊」

具体的な高さを知る手がかりは、平安時代中頃（西暦970年）に著された「口遊」に残されていました。そこには当時の大きな建物ベスト3として「雲太・和二・京三」の一文があります。



「口遊」の書かれた頃の東大寺大仏殿の高さは15丈(45m)あったことがわかつており、「雲太」つまり出雲大社本殿はそれ以上の高さであったことが読み取れます。

一方室町時代ころの言い伝えでは昔の出雲大社本殿の高さは16丈(48m)とも、さらに32丈(97m)とも書かれてきました。また平安時代から鎌倉時代にかけて5~6回の本殿転倒の記録もあり、かなり大きな本殿が建っていたと思われます。

古代本殿の平面図！ 「金輪御造営差図」を読む

虫食いのあとが…

「柱口一丈」

柱の直径が
なんと1丈=3m!!

現在の宇豆柱



「岩根御柱」

中心の柱はひとまわり太く
描かれています。

「引橋長一町」

本殿にあがるための1町=約109m
の長い階段があったようです。

桁(けた)

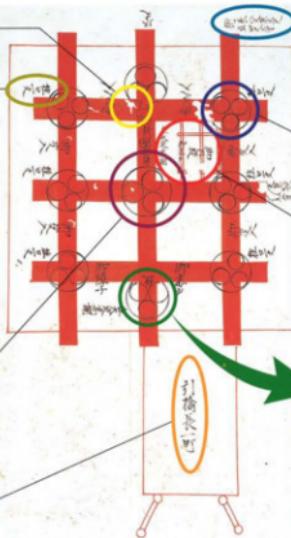
長さ八丈=24m
厚さ3尺=90cm
幅4尺3寸=130cm

三本の柱材を
一本に束ねている

外側の円は金輪(鉄の輪)?。
団の名前はここからきました。

御神座は現在と同様に

西に向いておられたことがわかります。

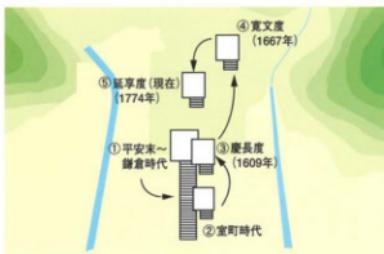


金輪御造営差図（出雲国造千家所蔵）

実際に出土した宇豆柱

社殿のれきし

本殿位置のうつりかわり



出雲大社の境内は背後と東西を山々に開まれており、その袋状の空間域では絶えることなく祭祀が営まれてきました。長い歴史のなかで、社殿はその姿と場所を少しずつ移しかえながら建てられていたことが、発掘調査によって少しずつわかつてきました。



これまでにわかつたこと

【古墳時代前期】

が跡・溝跡を確認。祭祀用土器・まが玉・白玉などが出土地。

【平安時代末～鎌倉時代】

巨大柱を3箇所から確認、またその巨大性を物語る遺物の出土。

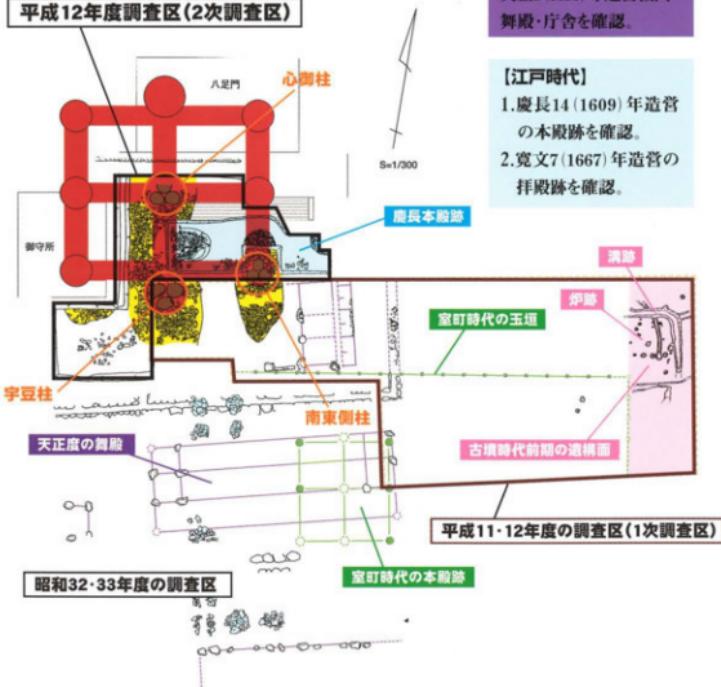
【室町時代】

本殿跡や本殿を囲む垣跡(玉垣)を確認。

【戦国時代】

天正8(1580)年造営樓門・舞殿・序舎を確認。

平成12年度調査区(2次調査区)



出雲大社のれきし

縄文時代



(晩期)
今から約2500年まえ

人々がこの場所
で活動を始める

弥生時代

(中期)

今から約2000年まえ

真名井遺跡出土
銅戈・ひすい勾玉



境内の東200m
命主社の裏にある巨石の下から
出土しました。銅戈は武器の形を
した祭器用の青銅器です。

古墳時代



(前期)

今から約1700年まえ

祭祀用の土器片とまが
玉2個、臼玉
12個が出土



まが玉・臼玉

飛鳥時代



659年(齊明天皇5年)

「出雲大社造営の年記の明らかな初め。
「出雲国造に命じて、神の宮を修嚴させた」

それぞれ解説が2説ある

神の宮

修嚴

A:出雲大社
B:熊野大社
(八束郡八雲村)

A:修理させた
B:あらためて造らせた

奈良時代



733年(天平5年)

『出雲国風土記』編さんされる。

「大国主神の宮を造るために、神々が集まって
杵でつき固め築いた。それゆえ出雲大社の
ある地域を「杵築」と呼ぶ。」

「出雲大社の柱材は吉栗山(簸川郡佐田町)
から切り出す」

平安時代

970年(天禄元年)



『口遊』に東大寺
大仏殿(当時45m)
より高い建造物と
うたわれる。

復元模型48m(16丈)の本殿
(島根県教育委員会提供)

1031年(長元4年)社殿転倒

1036年(長元9年)正殿式遷宮

31年

1061年(康平4年)社殿転倒

1067年(治暦3年)正殿式遷宮

47年

1109年(天仁2年)社殿転倒?

1114年(永久2年)正殿式遷宮

31年

1141年(保延3年)社殿転倒

1145年(久安元年)正殿式遷宮

45年

1172年(承安2年)社殿転倒

1190年(建久元年)正殿式遷宮

1225年(嘉祐元年)社殿転倒

このころ参拝した寂蓮法師は
「この世のこととも思えない」
と表現している。背後の山(八
雲山:高さ100m)の半分近く
あったという。

1248年(宝治2年)正殿式遷宮

鎌倉時代



このころの境内を
描いたといわれる
絵図

「出雲大社并神鄉圖」
(出雲國造千家宗所藏)



上の絵図をもとに復元した模型
(島根県教育委員会提供)

1270年(文永7年)火災

この場に葱づけられた臣民たちが思われます

本殿の規模が小さくなる

1282年
1325年
1386年
1412年
1442年
1467年
1486年
1519年
1550年
1580年

「仮殿式」遷宮



「室町時代の本殿を跡（玉頭）」等間隔に柱が並んで出土しました。



1609年（慶長14年）

「仮殿式」遷宮



「杵葉大社近郷始縫」
(出雲国造北島家所蔵)



左の絵図をもとに復元した
模型
(島根県教育委員会提供)



出土した慶長本殿の柱跡

1667年（寛文7年）

正殿式遷宮



「杵葉大社境内絵図」
(出雲国造千家家所蔵)



絵図をもとに復元した模型
(島根県教育委員会提供)

近代・現代

1744年（延享元年）

正殿式遷宮



現在の本殿（国宝）が建てられる。本殿の規模・高さは寛文造営と同じであり、手前の拝殿は昭和34年に再建されたもの。



今回の発掘調査は、拝殿の地下祭礼準備室の工事にもなう事前の調査として平成11年9月から実施しましたが、出雲大社のご理解により工事は中止され、現状保存されることになりました。調査によって、これまでわからなかった大社の歴史について、各時代のようすが明らかになってきました。

今も年間を通じて諸祭事が奉仕され多くの参拝者で賑わう出雲大社ですが、お祭りの始まりが少なくとも4世紀頃まで遡ることをしめす祭祀遺物の出土、また、古く「天下無双の大廟」と称された伝統の日本一の高層神殿の3本組柱の柱根の検出は特筆されます。

なぜこうした高層の神殿が造営されたのか、伝えられる高さ48mに及ぶという巨大な神殿とはどのようなにして建てられたかなどなど、現在、考古学・歴史学・建築学・宗教学など多方面で研究がすすめられていますが、さまざまな謎が解明されるにはまだ時間がかかりそうです。引き続き大社町教育委員会では、出雲大社・文化庁・島根県教育委員会のご協力をいただきながら調査を予定しています。

出雲大社境内遺跡なんでもQ&A

Q: 柱に使う木はどこから持ってきたの?

A: 奈良時代(733年ごろ)には、麻川郡佐田町の吉葉山から切りだされていたことがわかっています。平安時代(1110年ごろ)には大社近くの稻佐浜に大木が流れつき、これを使って本殿をつくったという不思議な伝承が残っています。今回見つかった柱材はどこから持ってきたのか?まだよく分かっていません。

Q: 木はなんで腐ってなったの?

A: 境内地が扇状地になっているため、地下水位が非常に高いいつも水に浸かっていたためと考えられます。

Q: 木の年輪はいくつあるの?

A: おおよそ130から180ほどあり非常に育ちの良い木を使用しており、意図的に育てられた可能性もあります。

Q: なぜ3本束ねの柱なの?

A: 直径3m近い柱を1本でつくるのは不可能です。そのため3本の柱材を寄せ束ねて、1本の巨柱をつくったのでしょうか。また高層神殿の柱は直ぐだったので、継ぎ木をする必要があります。継ぎ木の位置を3本それぞれらずして継ぐことで強いつばをついたのでしょう。



Q: 柱はどうやって立てたの?

A: 当時は、クレーンなどなく、すべて人の力で立てられました。具体的な工法は現在研究中ですが、(株)大林組の計算では、柱立てのみでも延べ5,900人。なんども転倒と再建を繰り返しながら、高い柱を立てる高度な方法が引き継がれたのです。

Q: 木の周囲にあった石はどこから持ってきたの?

A: 石の種類を分類した結果、出雲大社の両側の谷筋から運んできたと考えられます。

Q: 柱を固定するのにどれくらい石を使ったの?

A: 宇豆柱の場合最低約20t(1~140kg・平均4.5kg)の石で固定されたと考えられます。

Q: 今の本廟いつ建てられたの?

A: 江戸時代中期の延享元(1744)年に建てられた本殿で、現在御室に指定されています。

■協力

出雲大社

■編集

島根県大社町教育委員会
キャラクター作成/中尾佑次
(東京在住・大社町出身)

■お問い合わせ先

大社町教育委員会
TEL:0853(53)4441
FAX:0853(53)2677

■印刷 (有)ワン・ライン
■発行 平成13年3月

交通案内

